

吉野作造記念館だより

〈編集・発行〉特定非営利活動法人 古川学人

読売・吉野作造賞受賞者講演会 ロゴ・マーク作品表彰式 2004年11月20日(土)に開催

古田博司氏（筑波大学大学院教授）は、著書『東アジア・イデオロギーを超えて』で、「二〇〇四年読売・吉野作造賞」を受賞しました。この賞は、二〇〇〇年度より読売論壇賞と吉野作造賞（中央公論社主催）を一本化し、新たな賞としてスタートしました。

当館では、古田氏を招いて、「東アジアと日本の未来」を演題に講演会を開催しました。近隣国である中国・韓国・北朝鮮の話題を中心に講演を行い、会場を訪れた方々は興味深く聞き入っていました。

講演会要約については二頁をご覧ください。また、講演会の内容を講演録として作成しましたので、ご希望の方は当館までご連絡下さい。



2004年読売・吉野作造賞を受賞した古田博司氏



ロゴ・マーク採用作品に選ばれた鈴木寛氏

当館では十周年を記念し、ロゴ・マーク作品を募集しました。審査の結果、応募総数一八三点より鈴木寛氏（宮城大学事業構想学部デザイン学科）の作品が受賞し、表彰式を行いました。

採用された作品は吉野作造の精神である「人」を大切にする』意味をモチーフに作成したものです。「人」という文字を囲むように、丸い点を三カ所に配置し、線と点で「和・輪」を表現したデザインです。

また、採用作品は広報活動に使用するほか、販売品としての活用も検討しています。これから当館のロゴ・マークとして情報発信して行きます。沢山のご応募を頂き、心より感謝申し上げます。有難うございました。

読売・吉野作造賞受賞者講演会

「東アジアと日本の未来」

古田博司氏

二〇〇四年十一月二十日に当館に於いて、二〇〇四年の読売・吉野作造賞受賞者である古田博司氏の講演会を行いました。演題は「東アジアと日本の未来」と題して古田氏の歩んできた道と研究内容、今の北朝鮮・韓国について、そして、最後に「東アジア・イデオロギー」について、整理され分かりやすく軽快なテンポで講演いただきました。講演終了後は相次いで質問が飛び交い、私たちの近隣国に対する関心の深さを感じました。

古田氏の

歩んできた道

一九五三年神奈川県横浜市で生まれ、慶応大学・大学院に進み、紆余曲折の末現在筑波大学大学院の教授になった。もともとと大学では東洋史を専攻し中国の歴史研究をしていた。大学院では、朝鮮史の研究に変わり、三年目で修士号を取得し卒業後に友人の紹介で、韓国に日本語の先生として六年間滞在することになり深く朝鮮を知ることとなる。日本に帰って五年間市立大学の韓国語教師をして、筑波大学から声がかかり政治学の教授となる。

今の北朝鮮は

どんな国か

北朝鮮の国は、一九九三年、今から十一年前に計画経済の放棄、社会主義の放棄、経済の退歩。ただの貧窮の独裁国となっているのが現状である。

現在の韓国は

どうなっているのか

韓国は今どうなっているかというところ、左翼政権の国になっており北朝鮮に近親感をもっている。韓国の国民世論は親北朝鮮に様変わりし、反米が合体し韓国

の思潮は反米親北になってしまった。

東アジア・イデオロギーとは何か

中国というのは、頭が共産主義で体が資本主義の国である。中国の儒教は、礼の実践ぐあいによって、差別をしてランク付けをしている。これを「華夷秩序」といい、難しい言葉で華は中華の華、文明の中心ということである。

アジアにとって、中国はもろん徹底した中華思想。朝鮮も実は中華思想。それでは日本はどうかというところ、日本も自分たちが中心だと言い始めた。それは「皇国」という言葉に象徴される。中国、朝鮮、日本、実はみんな自分がアジアの中心だという意識を抱いて近代に入ってきたのである。これがこの東アジアという地域の難しさである。みんな自分が盟主になりたいと思う。経済力の一番強い日本が盟主になろうとすると、引きずりおろそうとする。これがイデオ

ロギーになっていて、共同性の形成を妨げているのだというふうに書いたのが、今回賞を頂いた本である。

東アジアが何か、経済共同体のようなものがほしい、共同体のような組織を作ろうと思うのだったら、それぞれが「自分たちが中心」だと思ふ意識は、少しづつ矯めていかなければいけない。そうすれば東アジアは、交流がある程度できるということになってくるということを繰り返して述べた。でも、現在の韓国、北朝鮮、中国、そういったような東アジア諸国はむしろ逆

の方向にどんどん進んでいる。どうしても自分たちの中華思想が棄てられない。その中華思想のうえにナショナリズムが載っかっていきますから、二重構造のナショナリズムがどうしても超えられない。そして、各々が自分中心だという意識で突っ走るわけである。

上記文は、古田博司氏の講演録より抜粋しました。

なお、講演録は無料（郵送料は別途）で差し上げております。ご希望の方は、吉野作造記念館までお問い合わせ下さい。



講師 古田博司先生
演題「東アジアと日本の未来」

「古城尚友会」について

一九一五(大正四)年八月二十日 吉野作造演説会

館 長 田 中 昌 亮

本郷教会発行の雑誌「新人」一九一五(大正四)年に吉野作造は「旅の空より」を書いた。一部を引用する。

八月二十七日再び青根温泉の客となりて當時の事を認めんとするに感興更に湧かず。唯講習は豫定の如く十八日より二十三日に及び、其間原町小學校に於ける宮城郡教育會、並に郷里古川町郡公會堂に於ける古城尚友會講演會にて演説せし事を記憶するのみ。

吉野作造日記(岩波)をみると、この時期は空白となつてゐる。古城尚友会とはどんな団体か。また演説会はいつ開催されたのか。佐々木平太郎日記・書簡に次のように書いてある。

(一部省略)

一九一五(大正四)年八月六日・晴
忠右衛門サン尚友会ニ
吉野作造サンヲ招待スルニツキ
相談シテ古川ニ歸ル
八月二十日・雨

七時半渡波ヲ出発シ雨降り来リテ
九時イクラカノ汽車ニテ石巻ヲ出発ス

三日町ノ伯父サン馬車ニ荷物ヲ忘レタルヲ思イ出シテ大騒ギ
小牛田十一時過ギ出発シテ古川ニ

十二時前着キタリ一時角田君ヘ行キ
三時ヨリ石川君角田君ト共ニ

公會堂ニ行ク安住君ヲ駐車場ニ待ツタルガ来ズ

吉野博士ノ話終リテヨリ 茶話會

吉野サンハ直ニ歸ル

これによつて演説会は八月二十日に開催されたことがわかる。

謹啓

前略本日古城尚友会本部開催の件につき

相談すべきに付本日午後正四時古川小學校應接間まで

御参集相成りたく御通知候也
大正參年七月二十七日

佐々木忠右衛門
在校学友会幹事

佐々木平太郎君
佐々木英雄君

忠右衛門より平太郎宛のハガキに次のようなものがある。

お手紙拜見

本日正午古川小學校内同會宛「遙かに盛會を祝す」と三浦會長小生連名して電報を

出すべく候
先はお知らせまで

大正五年一月二十九日
東京帝国大学図書館にて十時

佐々木

市内芝三田四丁目一番地
松浦方

佐々木平太郎様

平太郎の一月二十九日の日記をみると尚友会の送別会が行われたのがわかる。

一月二十九日 晴・風
八時頃忠右衛門君ヨリハガキ来リ尚友会ノ送別会ニ三浦會長ト

忠右衛門君トノ名デ祝電ヲヤツタト云ウ

また尚友会の歌もあった。

大正六年一月一日・晴

谷地森君ヲ初メ八人集リテトラ
ンプニテ
楽シム

四時頃 角田君ト共ニ

忠右衛門君ヲ訪問シ
尚友会の歌ヲ貫ヒテ来リ

古城尚友会については佐々木平太郎書簡及び日記にたくさん
の記述がある。

手帖には古城尚友会の例会出席者名・会費の徴収の記録もある。

また、尚友会では古川中学校卒業記念の立派なメダルも制作している。古城尚友会は古川小學校卒業生で古川中学校生徒及び卒業生が会員であるように思われる。講演会・親睦會等を開催し、吉野との交流も深かった。

この会については不明な点が多い。御存知の方は教

えていただきたい。

◎佐々木平太郎 古川中学校十四回卒業・大正十年慶大政治

科卒業・橋平酒店店主(六代目平之丞)

◎佐々木忠右衛門 古川中九回明治四三年卒業第一高等学校・

東京帝国大学法律科に進む。朝鮮総督府勤務

◎吉野日記一九三二(大正十二)年に記述あり

四月七日

夜十一時半書く今朝佐々木忠右衛門君歸つたばかり明日帰任するとなり朝鮮統治の心得など懇ろに話す

(日記・書簡は橋平酒店、佐々木一郎氏提供である)



古川中学校卒業記念の立派なメダル



聞き書き

吉野作造と富士省三

—富士裕氏に聞く—

古川中学第一回卒業生の富士省三は、同郷の先輩である吉野作造の思い出を『古川高校創立六十周年記念誌』（一九五七年）で語っているほか、吉野・鈴木文治と偶然出会った際のことを語っていたという。そこで古川市横町在住の次男富士裕氏にお話を伺った。

富士家は江戸時代中期から古川に住んでおり、曾祖父吉之助は県会議員、祖父は執達吏（裁判所の執行役人）であったという。祖父は当時としては教育熱心で、省三の妹は日本女子大学に入学、次妹も仙台の第一高等女学校に通ったという。

岡高等農林（現岩手大学）で農芸化学を研究、のちの東大農学部で鈴木梅太郎にも師事したという。母校教授ののち、古川農事試験場初代場長などを務めた。省三は、古川中学校時代、二高から帰省中の吉野にテニスと野球を教わったとの回想文を『古川高校創立六十周年記念誌』（一九五七年）に寄せていた。一九九七年（明治三十）、七月下旬から夏季休業となりボンヤリ家で遊んでおると友人が迎えに来て学校に行ったら吉野作造、大泉哲、伊沢宗平の三先輩が居てローンテニス（テニス）をやるから手伝えというのである。このとき野球も教わったという。吉野はその後も「夏休みには欠かさず指導して下さいました」



富士省三

富士省三は、同郷の先輩である吉野作造の思い出を『古川高校創立六十周年記念誌』（一九五七年）で語っているほか、吉野・鈴木文治と偶然出会った際のことを語っていたという。そこで古川市横町在住の次男富士裕氏にお話を伺った。

という。これが、古川で初めてテニスと野球が行なわれた記憶となった。

富士裕氏のお話によれば、省三が宇都宮高等農林学校（現宇都宮大学）教授の時、東京の市電である上野の須田町駅で電車を待っていると、ちょうど吉野と鈴木文治が連れ立ってくるのに出会ったという。吉野は「鈴木君は、今度国際会議でジュネーブに出かけることになった、鈴木君もこれによってますます将来有望だ」と言ったという。その後出会うことはなかったという。

「ジュネーブ」という言葉からすれば、出会った時期は、一九三二年十月、国際連盟臨時総会の日本代表随員として鈴木がジュネーブに向かったときのことであろう。この時吉野は五四歳、亡くなる半年前のことで、十二月には入院しているから、最後の出会いであった。

吉野については常に「先生」という敬称をつけて呼んでいたという。戦後片山哲社会党内閣が出来たとき、本当なら鈴木文治が首相となるはずだったのに死去のため実現しないで終わった。鈴木死去の報を新聞で知り、「あいつも死んだか」と省三はいったという。

（故人は敬省略しました）

研究紀要第二号発刊

三月三十一日に『吉野作造記念館研究紀要』第二号が発刊されます。今回はマスメディアやホームページを通じて論文を公募し、今回は気仙沼市の小山玲子氏を通じて応募された王超偉氏（洛陽外国語学院副教授）の「吉野作造の国益観の転換」に決定しました。王氏は来日経験がなく、小山氏を通じて論文を書き上げました。中国では著書として出版したものだそうですが、日本では未公開の論文であり、吉野研究の世界的な拡がり的一端を示す論文として、翻訳して掲載することにしました。

筆した幻の著作『答案の書き方』を入手された九州大学文学部助教授山口輝臣氏が多忙の折紹介の労を取ってくれた上、一月中旬に来館され、本の寄贈をも申し出て下さいました。

また本号から、外国語による研究を翻訳紹介します。第一弾としてチュニジア人ターレク・シュヒディ氏の「近代日本とチュニジアにおける改革主義の思想家—吉野作造とターヒル・ハッダード—」を掲載しました。シュヒディ氏は上智大学でこのテーマで博士号を取得しています。

また、田中館長による「戸石泰一『秋の星空』を読む」は本年度開講された吉野作造講座の成果です。田澤晴子「吉野作造の足跡を訪ねる—ハイデルベルク・ウィーンを中心に」は昨年七月から八月にかけて丸山真男手帖の会のメンバーとの調査旅行の詳細な記録です。

また本号から、外国語による研究を翻訳紹介します。第一弾としてチュニジア人ターレク・シュヒディ氏の「近代日本とチュニジアにおける改革主義の思想家—吉野作造とターヒル・ハッダード—」を掲載しました。シュヒディ氏は上智大学でこのテーマで博士号を取得しています。

当館における本年度の事業報告なども紹介しています。盛りだくさんの第二号、どうぞお買い求めください。（頒布価格千円）※なお、創刊号も発売中です。（価格八〇〇円）

—吉野研究の国際化と幻の著書を紹介—

平野 敬和
「吉野作造とアジア」
小野寺 弘

「第一次大戦期における農商務省の労働行政と吉野信次」
田沢 晴子

「郷里意識からの脱却」他

これまでのイベント紹介

2004年9月 ～2005年2月

近代化遺産ツアー2004

二〇〇四年一〇月二十三日

古川市教育委員会主催、NPO法人古川学人後援により近代化遺産ツアーが行われました。これは、今なお残る歴史的建築物を巡り、その歴史や保存の大切さを再確認するという企画で今年で四回目となります。今回は三十八名の参加者と共に、「近代建築の現在とその歴史」というテーマのもと、仙台市に足を運び現存する近代建築を見学しました。

〈行程〉 古川市役所（集合） ↓東北学院大学土樋キャンパス ↓
光原社 ↓東北大学片平キャンパス

東北学院大学 土樋キャンパス

東北学院大学では、三つの建物を見学しました。最初に事務局の薬科明宏さんの案内でラーハウザー記念礼拝堂を見学。この建物は、一九三二（昭和七）年に建てられ、現在も礼拝堂、地下は東北学院資料室として使われています。当日は、実際に行われている礼拝に参加しまし



シップル館

た。正面に設置されているステンドグラスが印象的で、皆さん熱心に見入っている様子でした。その後、東北学院資料室に移動。東北学院の歴史に触れ、また開催中の特別展示「大正デモクラシーと東北学院」を見学しました。次に、シップル館という洋風住宅を見学。この建物は一八八七（明治二十）年頃、宣教師デフォレストの住居として建てられ、後にシップル神父が居住



東北学院ラーハウザー記念礼拝堂

したことからシップル館と呼ばれるようになりました。土樋キャンパスでは最も古い建物で建築から一二〇年近く経過しています。最後に訪れたのは、本館です。一九二六（大正十五）年に建てられ、正面の真正面に位置しています。現在は事務管理棟として使われています。

東北大学 片平キャンパス

片平キャンパス内には、明治大正期に建てられた東北帝国大学、旧制第二高等学校、仙台医学専門学校、仙台高等工業学校の校舎が今も残されています。まず、東北大学史料館にて研究員の永田英明さんの案内により「魯迅先生東北大学留学百周年記念特別展 魯迅 歴史のなかの留学生」を見学。魯迅の成績表やノートなど大変貴重な史料に、参加者の方も関心を示していました。史料館となっている建物も一九二五（大正十四）年



旧制第二高等学校門柱

建造です。他に、一九二三（大正十二）年東北帝国大学理学部生物教室として建造され、現在は放送大学宮城学習センターとなっている建物、旧制第二高等学校の門柱、最後に魯迅住居跡を見学し、今回のツアーを終えました。

新しい建物が立ち並ぶ仙台市中心部にも、普段は見落とされがちで数多くの近代建築が残っています。それら建物の歩んできた歴史を知り、また保存し活用していくことの大切さを実感したツアーとなりました。



放送大学宮城学習センター



魯迅住居跡

吉野作造講座

二〇〇四年九月十八日～十二月二〇日

多くの人に吉野作造について興味を持ってもらおうと、今年度も当館館長田中昌亮による吉野作造講座が全六回にわたり開かれ、毎回二十名を超える受講者が集まりました。今回は「天は東北山高く―吉野作造と旧制第二高等学校―」を主なテーマとし、学生時代の吉野作造にスポットをあて、たくさん資料を用い、吉野の人物像にせまりました。また今回は、講座の特別企画として音楽会「吉野作造少年『大正』という時代―」も開催しました。



講座の中では、尚絅女学校の初代校長で、バイブルクラス

(聖書研究会)を主宰し、吉野をキリスト教入信へと導いたミス・ブゼルの軌跡や、旧制二高キリスト教団体である忠愛之友倶楽部の活動、その他、仙台での吉野を知るうえで重要な人物や、場所などを資料とともに紹介しました。

受講者の皆さんは、大変興味深く聞き入っており、新たな吉野像を知っていただけたのではないでしょう。



音楽会

二〇〇四年十月二四日

吉野作造の生きた時代を歌でふり返る音楽会を開催しました。大正・昭和初期の歌十一曲を古川女性合唱団「アイリス」と指導者の中本義弘氏、アコーディオン演奏者の鈴木芳郎氏、古川マンドリンクラブの松沢敏夫氏に演奏していただき、その曲間には唱歌にまつわる吉野のエピソードや当時の時代背景など解説を交えながら紹介しました。吉野が実際に歌ったり聞いたたりした曲、吉野と関係のある人々の曲などを当館館長田中が選曲しました。

吉野作造と関係のある人々

「荒城の月」は土井晩翠の代表作です。土井は吉野の七年先輩にあたります。土井と吉野の交流は様々な場面に見受けられます。「青春の意気」は浪人会との立会演説会での吉野の勝利を称え土井が作詞し、それに弘田竜太郎が作曲したものです。弘田と同じ作曲家で吉野と関係の深い人物に小松清がいます。小松は吉野の三女光子と結婚しました。東京大学、東京藝術大学の教授となった一方で、東京音楽学校選科器楽科に入り、ピアノと作曲を学び、作曲家、音楽評論としても活躍しました。小松作曲の「高体連の歌」は今もなお歌われています。

吉野作造と讃美歌

吉野は「小学時代の思ひ出」(新旧時代・一九二六年二月号)で、「始めて教わった唱歌は『見渡せば青やなぎ』とかなんとかというのであった」と述べています。この「見渡せば」は讃美歌の旋律に歌詞をつけたものです。この曲は「むすんでひらいて」と歌詞を変え、リズムも若干早くなりましたが、いま



合唱の様子



演奏者の方々

一九三三年、東京で大流行していた曲で、東京の人々が連日歌ったり、踊ったりしていました。

吉野作造とその時代

「抜刀隊」は西南戦争の際、敵の将兵の勇気ある行動をたたえた内容になっており、発表当時から圧倒的な人気を博していました。いつの時代もその時代背景を反映する音楽が流行します。普選運動が活発になった頃には「デモクラシー節」が歌われ、労働者の団結が強化され情勢が変わり動いてきた頃には「労働問題の歌」が歌われました。

「夜光の杯」は山形高等学校大正十一年六寮寮歌です。これは吉野が講演会で山形の地を訪れたことから選曲しました。「東京音頭」は吉野が亡くなっ

ても幼い子供たちの間でひろく歌われています。讃美歌はキリスト教徒であった吉野の人生に度々登場します。「花よりめでにし」は吉野がヨーロッパ留学中に下宿先で歌った歌ですし、「讃美歌四八九(旧五八五)番」は吉野の葬儀で歌われました。

博物館実習

二〇〇四年八月十七日～二十二日

昨年に引き続き博物館実習生の受け入れをしました。本年度の実習生は東北学院大学文学部史学科の3年生3名です。実習生の感想の一部を紹介します。

今野 良隆

六日間の博物館実習は、短いながらも充実した日々だった。私にとって、この博物館実習は学芸員資格のためというだけでなく、日頃知ることの出来ない博物館の裏側を体験することで、それまでとは違った視点を通して、それが出来るのではないかという思いもあった。

大学の講義から、博物館はどちらかといえばそれ自体で成り立っていると考えていた。ところが実際に実習を受けていくにつれ、博物館は単独で成り立っているわけではなく、市町村の教育委員会や住民など地域社会と関わりながら成り立っていることを実感した。



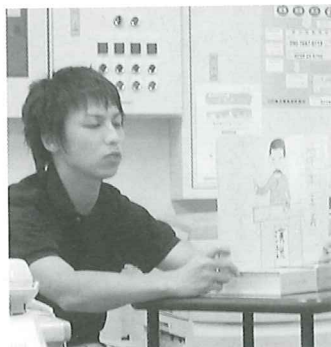
千葉 晴貴

博物館実習を振り返ってみると、この一週間はあっという間だった。短い期間だったが、博物館運営や展示環境などについて説明を受けたり、展示をわかりやすく説明する方法、常設展示室の入替え作業、企画展などを自分で考え、発表したりと様々なことを体験した。実際にやってみて、思った以上に難しいことがわかった。また博物館が知られていない厳しい状況というのも知った。

日程	内容
8月17日	施設運営説明 展示説明 オリエンテーション (教育委員会)
8月18日	施設見学 ・緒絶の館 市民ギャラリー ・ササニシキ資料館 環境管理説明
8月19日	生涯学習課 文化財係担当
8月20日	受付体験 キャプション作成 『記念館を解り易くする為にはどうしたら良いか?』 考える
8月21日	常設展示室の展示入替え作業
8月22日	企画運営説明企画計画

守屋 美穂

六日間の博物館実習を終えて特に印象に残ったのは、劣化している史料を保護する為に行っていた常設展示室の入替え作業である。入替えする史料を数点選び、それに代わるものを私たち実習



学芸員は資料収集、企画、展示など多くの作業をやらなければならぬ。学芸員の仕事については大学の講義でも習っているが、実際に自分で経験してみるとその広さを改めて感じた。

生が選定し、キャプション作成も行った。私は「アカデミズムの人・吉野作造」というコーナーの中の「歴史家としての吉野」を紹介している箇所に注目した。大正期、第一次世界大戦をはじめ、大きく変化しつつあった世界に対し、吉野が歴史家という視点でどのように現代史をとらえていたのか、歴史を学んでいる者としてとても興味があった。

井上ひさし講演会

二〇〇四年九月二四日(金)

当館名誉館長による恒例の講座が開催されました。

今回は超過密スケジュールの合間をぬい開催二週間前に日時が決定されたにもかかわらず、一六四名の井上ファンがかけつけてくれました。

講演会では、政治の目的は民衆の利益幸福を実現させることと、政治の最終的監督は民衆が行なうべきだとする吉野の「民本主義」の精神にふれ、日本国憲法の素晴らしさを強調、そして改憲論盛んななかで憲法九条を守るべきだと講演しました。

また、身近な地域を大切に、目の前の幸福を追求することが社会全体の幸福につながっていくこと、国民主権の現在、国民の持つ責任の重さを自覚するよ

来館者の方々にも政治学者としてだけではない吉野作造の一面もぜひ見てもらえたらと思う。



ううながしました。

プロ野球の労使交渉問題や仙台拠点をめざす楽天とライブドアの話など、ユーモアを交えて時事問題にもふれ、わかりやすく、楽しく話をしながら吉野の精神や主張を現代風に言い換えてみせる井上流講話は終始会場をわかせていました。

(吉野先生を記念する会・古川市教育委員会共催)



二〇〇四年九月～二〇〇五年二月 寄贈資料一覽

同略
不称
順敬

多くの方のご厚意を得て貴重な資料をご寄贈いただいております。厚く御礼申し上げます。

〈資 料 名〉

『Quadrante グヴァドランテ (四分儀)』No.1 他四点
 写真「柳田邸しだれ桜 (吉野作造贈呈)」
 『図書』 第665号
 『朝鮮日報』 二〇〇四年九月四日付
 『吉野作造の人生論ノート』
 『日本労働運動の父 鈴木文治』
 『尚志』 第82号
 『野村胡堂・あらえびす来簡集 一 明治・大正・昭和を彩る交遊録』
 『丸山眞男手帖』 第32号
 鳴子温泉写真ハガキ及び写真 28点

〈寄 贈 者〉

佐々木 源一郎
 柳 田 富美子
 万城目 牧子
 磯 田 淳
 松 岡 八郎
 吉野先生を記念する会
 和 泉 敬子
 野村胡堂・あらえびす記念館
 丸山眞男手帖の会
 佐々木 榮 董

新 資 料 収 蔵 展 示

二月二十二日より、本年度寄贈された資料のうち十五点を選び、ミニ展示を行っています。橋平酒造店六代目佐々木平太郎の日記 (明治～昭和期) や、吉野が民俗学者柳田國男に贈ったしだれ桜の現況写真、鳴子温泉の戦前の風景、そして、吉野の親友内ヶ崎作三郎の書 (軸装) などを展示しています。少ないながらも貴重な内容となっておりますので、ぜひ御覧下さい。



利 用 案 内

開館時間

午前9時～午後5時まで
 (入館は4時30分まで)

入館料

一 般 310円 高校生 210円
 小中学生 100円
 (団体20名以上、割引有)

休館日

月曜日
 (但し祝日・振替休日に当たる場合は翌日)
 年末・年始

バックナンバー

「吉野作造記念館だより」1号～11号
 「ご希望の方は記念館まで。」

(※一部「P」に対応しております。
 了承下さい。)

吉野作造記念館

〒989-6105 宮城県古川市福沼1丁目2番3号
 TEL 0229-23-7100
 FAX 0229-23-4979
 E-mail yoshino-npo.fg@blue.ocn.ne.jp